すべての〝未知〟は古本に続く

行って、見て、買って、そして売る

対談　岡崎武志さん × 小山力也さん

日本全国の古本屋を知り尽くす

――お二人はあちこちでトークショーや対談をされ、共著も出されています。知り合ったきっかけは？

岡崎　小山君が、日本国中の古本屋さんを巡って店の特徴やどんな本があるかを克明にリポートする「古本屋ツアー・イン・ジャパン」というブログを始めたとき、それが古本好きの間ですごく話題になったんです。「すごい人が出てきたぞ。これ書いてるの、誰やろなあ」と。「全国を回ってるからコンビニの営業の人じゃないか」とか「富山の薬売りは、今はないやろし」とか、勝手に噂が飛び交った……。

そしたらあるとき、僕が参加した「一箱古本市」（みかん箱一つに入る程度の古本を販売するフリーマーケット）に来てくれたんですよ。「ちわっす、小山です」って言われて、「ええっ、君か！」となって。

小山　岡崎さんがブログにコメントをくれるようになったんです。古書好きで岡崎さんを知らない人はいないから、「こんなスゴイ人からコメントをもらえるなんて」と感激し、いつか必ずあいさつしなくちゃと。

それで一箱古本市で声をかけました。あれは二〇一〇年だから、もう十三年くらいになりますね。

岡崎　そうかあ。長い付き合いやなあ。一箱古本市というのは千駄木を中心に始まって、今は百ヵ所くらいでやってますよね。素人さんが路上で古本を売るんだけど、そこから古本屋になった人もたくさんいます。コロナ禍では中止してましたけど、小山君も僕も同じ古本市に出ることがあったんです。僕らは買う側だけじゃなくて売る側でもある。一箱古本市や西荻窪の盛林堂書房の貸し棚、小山君は大阪梅田の蔦屋書店で棚を借りて古本を売ってもいました。西荻窪の銀盛会館では、毎年年末に盛林堂と我々二人で古本市を開いてトークして。結構よく売れたよね。

小山　あれで年が越せた。

岡崎　（編集者に）ところで、あなたはどこの出身？

――川崎の溝の口です。

小山　ああ、じゃあ明誠書房がある。

――そうです！　でも、最初に古本を買ったのは自由が丘の東京堂（東京書房）でした。年配の主人が奥にいて、入るとギロリと目を光らせて……。

岡崎　あそこは息子さんが継ぎましたね。人文系のいい本がありました。

――名前や情報が即座に出るなんて、すごい……。

岡崎　我々は地名を聞けばそこにある古本屋の名前を挙げられるんですよ。関心が古本屋にほぼ吸い取られているというか。

小山　我々って、一緒にしないでください（笑）。

経験を積むと本棚が見えてくる

――古本屋があればちょっと立ち寄るという人はいると思いますが、二人のように〝どっぷり〟つかっている人は、そうはいないのでは。古本との出会いは？

岡崎　僕は高校生くらい。大阪の京阪本線沿線に千林商店街という安くて庶民的な商店街があって、そこに四、五軒あったんですよね、いい古本屋が。最初は、一冊、三十円とか四十円の文庫本から買い始めて、そのうち今は出ていない〈品切れ・絶版〉の本があることに気づく。古本屋へ行く楽しみを知って、週に一度は学校帰りに行っていました。

小山　僕が住んでいたのは横浜の鴨居駅のあたりで古本屋はなかったけれど、三、四十年前は小田急OXと